

## 研究ノート

# ソーシャル・アンコンシャスはどのように語られるか

## —東日本大震災関係者の相互支援グループの例—

藤 信 子

### How Are the Social Unconscious Told? — From the Case of the Support Group for Persons Affected by the Great East Japan Earthquake —

Nobuko Fuji

## abstract

This study reports the function of the social unconscious in the group process of the support group for person affected by the Great East Japan Earthquake. The social unconscious expressions were extracted from the records of the 1<sup>st</sup> meeting of the group to the 28<sup>th</sup> meeting. There are 18 social unconscious expressions, they tells 11 events, Isewan Typhoon, Kanto Great Earthquake, Tokyo Great Air Raid, the Middle Japanese Sea Earthquake, Hanshin Awaji Great Earthquake, Okinawa Warfare, JALs Accidental Fall (Osutaka), the Atomic Bombing of Nagasaki, the Atomic Bombing of Hiroshima, Pollution caused by Ashio Copper Mine, and Miike Coal –Mine Explosion and Closure.

Then these expressions are identified what context included them to understand the function of these social unconscious. These expressed social unconscious in 4years process of the support group have functions to have the identity of supporter, to cope anxiety form radioactivity, and to cope with uncertainty.

## I. はじめに

人の思考・感情も含め行動は、個人の中で完結しているものではなく、環境との相互作用の中にある。しかしこの環境は個人を取り巻く現在の環境だけにとどまらず、個人の中の内的なグループ(集団)に影響されると考えられる(藤 2011)。Hopper と Weinberg (2011) は、人間の性質における自制の中に反映されている、ジェンダー、階級、人種、民族性、国籍、言語グループ等々の社会的事実、そして社会的トラウマに言及し、パーソナリティと社会組織の研究の側面と、人間の相互関係の文脈の中における精神病理の治療の双方にとって、ソーシャル・アンコンシャス(定訳が無いのでここでは、こう表す)の概念化が、グループ・アナリシス派の主要な問題であるとしている。

筆者は東日本大震災以後、災害支援者の相互支援グループを継続してきている。災害に遭遇し他者との断絶を体験することに対して、コミュニケーションの増大を図ることを治療の一つの目標とする集団精神療法が支援となると考えるからである(藤 2012)。その中でメンバーが、過去の災害・戦争など個人的には体験していない社会的外傷にまで及ぶ事象を連想することを体験している。グ

ループの経過は、これまで報告してきているが、ここでは表現されたソーシャル・アンコンシャスに限って見る、そしてそれが語られる機能を考える。

## II. 表現されるソーシャル・アンコンシャス

### (1) 相互支援グループの経過の中で出現したソーシャル・アンコンシャス

ここでは、2011年3月11日の東日本大震災後、日本集団精神療学会が構成し継続して実施してきている「東日本大震災関係者の相互支援グループ」（以下、相互支援Gとする）の第1回から第28回までの記録（高林 2011）、藤（2012）、西川ら（2012）、高林ら（2012）、田原ら（2013）、高林ら（2013）、藤ら（2014a）、藤ら（2014b）、田原ら（2015）から、ソーシャル・アンコンシャスが表現されている箇所を抽出した。このグループの経過の記録は、録音を起こしたのから、執筆者達によってその回のグループの雰囲気をよく表現していると考えられた箇所を取り出したものであり、グループの言語表現全体の約10分の1になるが、2011年～2014年のグループの経過の概観ができるからである。

第4回目の相互支援Gで、年輩のメンバーから50年前の伊勢湾台風の時に支援者は被災者から向けようのない怒りを向けられたという経験が語られた（藤 2012）。この時の会場は名古屋であり、当日は大雨に見舞われていた。伊勢湾台風のことを話されたメンバーに対して私たちコンダクターは、わざわざ名古屋まで来て参加されたのか、という印象を始めは持っていたが、この話を聞いた時にメンバー自らの50年前の話をして支援者に、災害支援についての心構えを伝えたかったのだろうという思いを持った。第8回目は2011年9月11日に開催されている。アメリカ同時多発テロから10年、3月11日から半年経った日だった。東京の会場が関東大震災の被害の大きかった場所だということ思い出し、当時のデマから現在の福島風評被害のことが連想された（藤 2012）。

第12回相互支援Gは、東日本大震災から1年後に東京で行われた（高林ら 2012）。コンダクターの一人が老夫婦の東京大空襲（3月10日）の話を始め、大震災と空襲の重なりを感じると話した。秋田のメンバーが地震と津波の時は京都にいて、日本海中部地震の時は東京にいて、いるべきところにはいない体験をしたことで、二つの地震が重なったと話す。阪神淡路大震災の体験を、神戸にかなり経って行ったら、住んでいる人たちは元気で生活力がある、行っても無力と語りながら、ここで何かヒントがもらえるかと語る。阪神淡路の震災の直後、「芦屋から5、6キロ歩いて実家に帰ろうとして」いる時に、「急にバタートーストの匂いがして」、「壊れた小さな喫茶店がカセットコンロでパンを焼き、コーヒーを紙コップで出していた。バタートーストがこんなにも人の気持ちをよくさせるものかと驚いた」（高林ら 2012）という回想もあった。沖縄の生まれで、「父が70歳を過ぎて戦争の話をしてくれるようになった」「父が生きていたからこそ自分がこの世にいることを有難いという思いもあるし、自分自身の存在がなかったかもしれないという思いと結びつく」（高林ら 2012）という思いも表現された。

第17回では、阪神淡路大震災の後、すまなさ、申し訳なさを感じていることは、災害に対する無力感だと気づいたのが、10年目だった。そのことに気づいたことで災害のグループを続けることが出来たということが語られた。また職場で同僚が亡くなり皆にとってトラウマだったので、グループをしたら、その後でスタッフから精神科の真髓を見ましたよと言われ、どうして御巢鷹の時にし

てくれなかったんだと言われた（藤ら 2014a）ということを知った時に、飛行機事故での災害への支援者の中に残る気持ちに少し触れた思いがした。第19回では、広島になかなか行けなかった、見ると何かしないといけない感じになって近づかなかった罪悪感がある、ということも語られている（藤ら 2014a）。第21回は9月1日で会場は東京であったため、墨田区の母の実家に関東大震災にこういことがあったという防災ポスターがあった、流言飛語があって朝鮮人が攻めてくるというので、それらしい人が襲われたという話は、日常的に差別していたから起きたのではないかと考えるメンバーの反応もあった（藤ら 2014a）。第22回の仙台で、子どもの頃長崎の爆心地の近くで育ったので、原爆の影響は急性期の印象が強く、原爆の直後は除染したらいいのかと思っていたらそれが進まないで、原爆の何十万倍というのはこんなことかと思ったと放射能の影響についての感じ方が話された（藤ら 2014a）。

第24回では、沖縄の小中学校では戦争の教育を、長崎では公立校では原爆の教育をしている。戦争・原爆・原爆も震災も語りづらい。東京の人は震災とかしんどいことを見たくないのだろうか（田原ら 2015）ということも出た。

第25回のグループでは、阪神淡路大震災の後、学校は避難所になるし休む暇がなく大変だったし、先生たちはとても疲弊した、それから数年後、神戸の学校で事件が起きた…そのことを考えると先生たちの疲労が心配、という話が出た（藤ら 2014b）。

第26回では、福島で帰還を巡って世代間の断絶が起きているということから、足尾銅山の鉱害、三池炭鉱の爆発と閉山など国策としての産業とその被害を連想する（田原ら 2015）。広島の人知人の父は公務員だったので原爆後、遺体の処理に従事した、その時の同僚で長生きした人は少ないという話を聞いた（田原ら 2015）。

## (2) 出現したソーシャル・アンコンシャスの種類

表現されたソーシャル・アンコンシャスは、以下のように11事象である。（ ）内はその出現回数。

伊勢湾台風（1）、関東大震災（2）、東京大空襲（1）、日本海中部地震（1）、阪神淡路大震災（4）、沖縄戦（2）、御巢鷹（日航機墜落事故）（1）、長崎原爆（2）、広島原爆（2）、足尾銅山の鉱害（1）、三池炭鉱の事故と閉山（1）。

この中で、阪神淡路大震災が4回と多いのは、この相互支援Gが阪神淡路大震災後に筆者らが継続して毎年開催してきた「災害とメンタル・ヘルス」を語るグループを背景として構成されてきている影響があるだろう。また近年の大震災ということもあり、被害についてある程度の実感を持つことができる経験となっている。他の事象に関しては、自らの生活の中で実際に体験したり、当時のニュースに接しているものは伊勢湾台風、日本海中部地震、日航機墜落事故（御巢鷹）である。三池炭鉱に事故と閉山に関しては、当時のニュースとして知ったことより、歴史的な産業政策の転換として後で理解していることである。広島・長崎の原爆、沖縄戦、東京大空襲については、親の世代から関東大震災は親族から直接というより、お年寄りから聞いた話として出ている。

## (3) ソーシャル・アンコンシャスが語られた文脈

この中で伊勢湾台風はグループの開催場所からの連想が生じており、東京大空襲は開催される日付から連想されている、そして関東大震災は開催場所と日付の双方が連想を産んでいる。沖縄戦に

ついて語られたのは、東日本大震災から1年後の日本集団精神療学会第29回の時だった。この時のグループは、3月11日の体験は判断をするのに必要な情報が出てこないのが戦争と同じだという連想があった。その中で今までは考えてこなかったけれど、自分の存在が無かったかもしれないことという沖縄戦の連想も生じている。日航機墜落事故は、メンバーが職場でのトラウマについてのグループを行った時に、参加したメンバーの想起である。広島、長崎の原爆は福島の放射能の問題に関連して連想される他、大きな惨事において無力感を思い起こす文脈で語られている。足尾銅山の鉱害と三池炭鉱の事故と閉山については、福島第一原発の放射能事故に関する文脈で、国の産業政策とその犠牲の問題として語られている。

### Ⅲ. 語られるソーシャル・アンコンシャスの機能

最初に語られた伊勢湾台風のことは、50年前の支援のことを伝えるために参加されたのかということ、支援者として覚悟を教えられた思いであった。そのメンバーにとってわざわざ名古屋まで来られたということは、Wilke (2011) が言うように集合的記憶が同一性と凝集性の感覚をメンバーに与えることになったと考えられる。支援者としての連想が浮かんでいるのは阪神淡路大震災に支援に出かけ、無力感を感じながらこのグループでヒントが得られないかという思いや、阪神淡路大震災の後に続けて思っていたすまなさや申し訳なさは、災害に対する無力感だと随分後から気づいたという連想は、やはり支援者としての同一性の感覚から生じているのだろう。

阪神淡路大震災の時にバタートーストの匂いが気持ちをよくするものだと感じた、という連想はマスとしてくぐられがちな大震災、災害の中で感じる個人的な体験を拾っていくことの大事さを気づかせるものだと言える。阪神淡路大震災の後、学校で事件が起きたことなどを思い出すのは、被災地で被災者であり支援者である人たちの疲労を心配しているが、それに対応する措置が見えないことへの不安から生じていると考えられる。

日航機事故の支援者から、あの時なぜグループをしてくれなかったんだ、と言われたという話は、トラウマに際して職場のグループで語ったことの意味から、事故当時の支援者へのケアについて思いを巡らす一方、集団精神療法を続けることの意味を再確認した。

放射能事故・汚染の情報の無さは、生活の中で何を基準に考えられるのかという思いから、長崎での戦後の生活を思い出しながら考えることに繋がっている。何十年も過去のことを手掛かりに考えるのは、そのような記憶に頼らざるを得ない情報の乏しい実情から生じてきているようである。

関東大震災当時のデマの連想から、不安の強さと差別の問題が話されたが、このことと当時の福島産の作物の対する風評被害とは関連することではないかと考えている。福島原発事故に関する思いが、昔の足尾銅山や50年以前の三池炭鉱の事故を思い起こすことは、私たちの生活を豊かにしていると考えられる産業は、必ずしも働いている人や個人の豊かさを目指すものだけのものとは考えられない面を持っていることに気づくことを教えているようである。

東日本大震災から4年間の相互支援Gの記録に表現されているソーシャル・アンコンシャスは、災害支援者としての同一性を与えてくれる機能をもっていた。そして放射能汚染の情報の無さに対する不安に対して、自分の知っている・聞かされてきた原爆後の生活を連想することで対処しようとする機能もあった。原発事故が起きたことから、今後の生活に対して、昔の鉱害や炭鉱事故など

を思い出すことで、今後の生活を考える時の手がかりとなる機能も持っていると考えられるのである。このようにソーシャル・アンコンシャスは、大災害から生じた将来への不安から、どうにか対応したいという気持ちの中から呼び起こされていると言えるだろう。

## 文献

- 藤 信子 (2011) 私の・外のグループ、内のグループ. 集団精神療法, 27 (2), 112-117
- 藤 信子 (2012) 集団精神療法の立場から - 相互支援グループを継続している経験から -. 精神療法, 38 (1), 53-57.
- 藤 信子・田原 明夫・高林 健示・西川 昌弘 (2014) 東日本大震災関係者の相互支援グループV - 災害から1年8ヵ月後～2年7ヶ月の経過 -. 集団精神療法, 30 (1), 49-55.
- 藤 信子・田原 明夫・西川 昌弘・高林 健示 (2014) 東日本大震災関係者の相互支援グループ - 経過と今後を考える -. 集団精神療法, 30 (2), 176-181.
- Hopper, E. & Weinberg, H. (2011) Introduction, Hopper, E. & Weinberg, H. (ed.) *The Social Unconscious in Persons, Groups, and Societies. vol.1: Mainly Theory, xxiii-iv.*
- 西川 昌弘・高林 健示・藤 信子・田原 明夫 (2012) 東日本大震災のための相互支援グループI - 3月11日から8ヵ月目に於ける初期作業位相でのグループ主題 -. 集団精神療法, 28 (1), 16-23.
- 高林 健示 (2011) 東北地方太平洋沖地震について話し合う会. 集団精神療法, 27 (2), 136-137
- 高林 健示・西川 昌弘・藤 信子・田原 明夫 (2012) 東日本大震災関係者の相互支援グループII - 第29回大会ワークショップで行われたグループ報告 -. 集団精神療法, 28 (2), 172-178.
- 高林 健示・藤 信子・田原 明夫・西川 昌弘 (2013) 東日本大震災関係者の相互支援グループ - 心的外傷の孤立化を対話により克服する場として -. 集団精神療法, 29 (2), 154-158
- 田原 明夫・高林 健示・西川 昌弘・藤 信子 (2012) 東日本大震災関係者の相互支援グループIII. 集団精神療法, 29 (1), 47-53.
- 田原 明夫・高林 健示・西川 昌弘・藤 信子・安部 康代・長友 敦子・針生 江美・藤澤 美穂 (2014) 東日本大震災関係者の相互支援グループVII - 経過と展望 -. 集団精神療法, 31 (1), 67-73.
- Wilke, G. (2011) Part V The Matrix of the Social System, Introduction. Hopper, E. & Weinberg, H. (ed.) *The Social Unconscious in Persons, Groups, and Societies. vol.1: Mainly Theory, 235-241.*

(本学大学院応用人間科学研究科教授)